書　評

『日本大学経済学部図書館：伝記および伝記関係書目録（欧文）』

東京　日本大学経済学部図書館 1985.3　227p.

川　原　和　子*

すぐれた書誌の作成で定評のある日大経済学部図書館が，再び世に放った労作である。同書の序文および凡例の言葉を借りれば，同館所蔵の経済学者の伝記―欧文のみ―を中心に，単行書1,712点が収録されている。点数については誤算があるようで，実はアイテム数にして1,815，重複エントリーを差し引いて1,794点に達すると思われる[1]。人物数は明らかにされていないが，索引で調べると叢伝からの参入347名（大部分が経済学と無関係）をふくめて，1,420名になる。

構成は，全体を3部に分って，第1部 Individual Biography，第2部 Collective Biography，第3部 Biographical Dictionary としている。再計算（注1）参照）によると，それぞれ1,612アイテム（1,591点），125点，78点が収録され，これに個人名もしくは家名による被伝者索引（Personal & family name）および伝記作者もしくは編者名索引（Author & Editor）が附されている。各項目（エントリー）の排列法は第1部個人伝が，まず被伝者名と生没年を，ゴシック体大文字によって見出語位置にアルファベット順に掲げ，同一被伝者の下に複数伝記著作がある場合は著編者名のアルファベット順に排列してある。ただし被伝者自身の自伝，書簡，日記等は，先頭に書名順に並べられている。第2部叢伝は，著編者を標目としてそのアルファベット順，第3部人名辞書は国別をとらず，単純に書名順排列としている。なお，印刷の体裁に関して一言すれば，天地，行間の空きは適切，字体も美しく，格調高い紙面をつくりだしている。

伝記以外に伝記関係書としては，前述の書簡，日記のほか，自・他による

* かわはら　かずこ　名古屋大学附属図書館専門員

1) 本文最終頁の175ページでは最終アイテムが1,733となっており，凡例による1,712点とは，3名までを扱った伝記の重複エントリーを整理した点数であろう。しかし，実際は個人伝1～1552A間で枝番1個の箇所が49，2個が6，欠番1（I.N. 364），叢伝1553～1665間で枝番1個が9，3個が1ヶ所，人名辞書1666～1733間で枝番1個が10ヶ所にわたって発生しているので，これを再計算すると1815アイテム－重複21＝1.794点となる。

回想録，言行録，旅行記の類い，研究書の一部が採択されている。記念論文集，選集・著作集等に多くの場合，伝記的記述や人物紹介，著作・活動年譜等が併載されるが，これらは収録対象となっていない。セリグマンの Encyclopedia of Social Sciences や，後年のシルズ編の International encyclopedia of the social sciences には，とくにセリグマンの方には経済学者のほか多量の社会科学・思想史・労働運動史上の人物項目を検出することができるが，これらも抽出収録されていない。ただし IESS の第18巻が伝記的補巻となっていて第3部に所収されているが，ESS，IESS ともになみの人名辞書よりもはるかに有効なトゥールなのだから，むしろその全体を収録すべきであったかもしれない。雑誌論文および新聞等の記事も無論収録対象外である。この点では，伝記書目とよく似た機能を提供する人物文献目録（Personal fibliography）が人物に関する断簡零墨にいたるまでを採録しようとする傾向と比較して，利用価値が限定されるのは止むを得ないであろう。

本来，所蔵目録の書評は書誌記述の形式内容，索引の組み方，記述・印刷の正確度，使い勝手といった技術的側面に限定されるものであろうが，それだけではたちまち出口に到ってしまう。いきおい，多少は収集内容にふれざるを得ない。図書館の資料収集は書物の市場性や，収集する側の主体的条件，財政状況に支配されて，意外に体系性を貫くことが難しいものである。むしろ偶然の要因に触発されて魅力のあるコレクションが生れたり，意図的に収集したつもりがかえって，平板でつまらない資料の集積に終ったりする場合も少なくない。そうした，労多くしてままならぬ収集のありようを承知の上で，あえて本書の収集の方向について少々注文をつけさせていただきたい。

率直に言って，方針が総花的というか，収集対象分野があまりにも拡散しすぎている印象をまぬがれないのである。もう少し選択をしぼりこむと同時に体系性をもたせた方がよいのではなかろうか。王侯貴族，政治家，文人，歴史家，芸術家，哲学者，実業家，自然科学者，職業軍人，ジャーナリスト，スポーツマン。評伝ならばおよそ分野を問わず巾広く網羅的に集められていて，思わぬ文献に出逢う意外性やたのしみもあり，これはこれで一つの行き方であると言えなくもないのだが。たとえば私自身は，Edinburgh Review の創刊に参加し，ロンドン大学を創立したブルーアム（Brougham, Henry Peter）や，Quarterly Review の創始者の一人であるクローカー（Croker, John Wilson），経済学者ジェームズ・ステュアートと運命的な絡み合いにあったダンダス家のヘンリー（Dundas, Henry.—ステュアートの親友 Robert Dundas の異母弟）の名前を見付けて（しかも，当のステュアートの伝記は

皆無なのだ）なるほど，と思ったりもした。ついでにステュアート（Steuart, James Denham, 1712-80）についての基本文献としては，Kippis, Andrew: The life of Sir James Steuart ... The Coltness collections, 1842., Anecdotes of the life of Sir James Steuart Baronet, *in* Steuart's Works, Vol. 6., Chamley, Paul: Documents relatifs a Sir James Steuart, 1965 などがあり，より簡便にはステュアートの Inquiry, Vol. 1 に附されたA. S. スキナーの解説がある。

もう一例をあげれば，スペイン市民戦争に参加した英文学者・詩人のスティーヴン・スペンダーの自伝が収録されているけれども，それならばジョージ・オーウェルやミドルトン・マリー，ジョン・コンフォードらも入れてそれなりの体系性をもたせれば，より密度の高い目録に仕上るであろう。オーウェルには評判の高いクリックの伝記（Crick, Bernard: George Orwell: a life. Secker & Warburg, 1980）があり，スタンスキーとアブラハムズの1930年代に関する3部作では第1部がコンフォード（Cornford, John）とベル（Bell, Julian）を扱い，第2～3部でオーウェルの生涯と著作を辿っている（Stansky, Peter & William Abrahams: [1] Journey to the Frontier. [2] The unknown Orwell. [3] Orwell: the transformation. Constable, 1966～1979).

そこで一体，経済学関係の採録量がどのくらいあるのか調べてみた。この場合の人物の抽出基準は経済学プロパーのみでなくて，経営・企業・実業（意外に少ないが，抽出もれがある）および関連分野—社会主義，社会思想，労働運動，フェミニズム（全部のつもり）と政治・文学・哲学・歴史の1部である。経済学者の抽出については，人によってさほどの違いはないとしても，周辺分野については評価が分れるところであろう。たとえば，文学・芸術上の抽出人物で，ディフォー，J. ラスキン，シャトーブリアンには経済学的著作があり，ウィリアム・モリス，チェルニシェフスキー，ゲルツェンらは思想史がらみという観点もあるがやはり経済学の著作がある。シェリーは当然，ゴドウィンとの関係で入っているが，シェクスピアやセルヴァンテスは入れていない。前述のヘンリー・ダンダスやブルーアム，イギリス革命期の人物フランシス・ノース，ジョージ・サヴィル，サミュエル・ピープス，渦中の人チャールズ2世等も抽出人物には入れていない。サミュエル・ジョンソン，ボズウェルもまたしかり（ボズウェルのジョンソン伝が本書には1点も収録されていないのはどうしたわけであろうか）。

したがって，計数は一応の目安以上のものではない。抽出結果は150名（総数1,420名中の10.5%），文献量500点（1,794点中36%）と出た。この

うち経済学者は約100名である。文献量は1人物1点から最高がマルクスの22点まで。スミス(19), J. S. ミル(15), レーニン(14), エンゲルス(11), ラサール(21), テュルゴ(15), R. ルクセンブルグ(9), モリス(9), ジョン・ロー(8), オーウェン(12), マルサス, ウェッブ夫妻がともに8点, トマス・モア(12), マクス・ウェーバー(7), ヒトラー(8)等, 歴史上の巨峰については, 追加すべき文献は当然あるにしてもさすがによく収集されている。一方重要人物でも, ケインズ4, シュムペーター2, ルソー3点はいささか淋しく, ヘーゲル, ベンサム, フーリエ各1点, ロック, リカード各2点は不当に失するというべきか。

収録人物についての追加文献は紙面の都合上2, 3を除いて割愛せざるを得ない。たとえばスミスだけでも10点くらいはあり, Fay, C. R.: Adam Smith and the Scotland of his day. 同じく The world of Adam Smith などは収集した方がよい文献であろう。スミスの最初の伝記を書いたスコットランド歴史学派の大立物 Dugald Stewart のその書は採録されているが, Stewart 自身の項目はない。ついでにあげておくと, Stewart, M.: Memoir of the late Dugald Stewart. 1838 がある。ウィリアム・ペティは本書で3点入っているが, 本書の1, 353, Southwell の項にあるペティ＝サウスウェル往復書簡集は当然ペティの項にも掲げておかなければならないし, 393の John Evelyn の日記もペティ研究上の重要文献である。ヒュームの項で7点あり, バートン, モスナー, 自伝等基本文献が揃っているが, 重要なものが2つ欠けている。Greig (J. Y. T.) 編の Letters of David Hume 2 vol. 1727～65, 1766～76. Clarendon Press, 1932 およびそれを補足した Klibansky, Raymond & Ernest C. Mossner の New letters. 同出版 1954である。この2点でヒュームの書簡はほとんど完全にクリアされているので必備である。他に Taylar, W. L.: Francis Hutcheson and David Hume as predecessors of Adam Smith. Duke U. P., 1965 等がある。フランシス・ハチスンについてはスコットの伝記が1点入っているが, 上記テイラーのほか, 同時代のリーチマン (William Leechman) に Some account of the life, writings, and Character of the author があり, ハチスンの Moral philosophy 2巻本1755年に附されている。ホッブズに関してはレズリー・スティーヴンと F. テニエスが入っており, 伝記としてはまずまずだが, オリジナルとしては, ホッブズの自伝と遺言2種, [Richard Blackburne] による伝記があり (名古屋大学. ホッブズ・コレクション目録第1期参照), 単独で入手できなくとも, いずれもモールズワース版全集, 1750年のMoral & political works of

Thomas Hobbes には収録されている。クラレンドン版の全集にも当然入るであろう。ほかに研究書中に評伝が無数にちらばっており，これはここでは追跡できない。あとテュルゴ，マルクス，ケインズ，マルサス，ミル，ベンサム，ウェーバー (Mitzman, A. の伝記はあった方がよい)，バスティア，リスト，ロック，ヘーゲル等について補うべき文献が多い。

最後に本書の収録から脱落している経済学者をあげてみたい。これは本書の編集方針にのっとって単行書の評伝のある人物に限った。全部列記するわけにはとてもいかないが，調査の範囲ではC. ダヴェナント，トマス・チャーマーズ，J. B. クラーク，アダム・ファーガスン，デュポン・ド・ヌムール，マカロック，マンドヴィル，メンガー，ミーゼス，パレート，ピグー，ケネー，J. ロビンソン，サミュエルソン，シュモラー，シスモンディ，J. D. ステュワート (前述)，D. ステュアート (同)，ウィリアム・タムスン，レオン・ワルラス，ウィクステッド，S. ベイリー，ボエーム・バヴェルク，H. C. ケアリ，J. B. クラーク，カッセル等計92名であった。調査の典拠をあげておくと D. N. B., Handwörterbuch d. Soz. wiss., ESS., IESS, ブラウグ (Blaug, Max) の Who's who in economics (本書 1716A) の各ソース文献および名大の所蔵本である。裏付けになる資料をあげず言いっぱなしになったのは，書評としてきわめて正当性を欠く行為でお詫びしなければならないが，もはや紙数オーヴァーである。第2部叢伝に Schumpeter の Ten great economists from Marx to Keynes が欠けているが，これだけでもボェーム・バヴェルク，ボルトキェヴィッチ，フィッシヤー，メンガー，パレートなどが参入してくる。他に Shackleton, J. R. 他編の Twelve Contemporary economists. Macmillan, 1981等も叢伝に加えるべきだし，Blaug 編で，Great economists since Keynes: an introd. to the lives & works of one hundred modern economists, 1985 なども出版された。第3部人名辞書の項では，一般辞書はともかくとして，メイトロン (Maitron, Jean) の例のフランス労働運動人名辞典 (継続中) が入っていないし，スコットランドについてはアンダスン (Anderson, William) の Scoltish nation, 3vols. Edinburgh, 1870. とチェンバーズ (Chambers, Robert) の Biographical dictionary of eminent Scotsmen. 4 vols. Glasgow, 1835 は必備文献である。D. N. B. はやはりイングランド中心なのである。